＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

GCOE NewsLetter
[No.9 2008/6/20]
---

gCOE大学院生説明会について
gCOE第4回国際研究集会の開催について
次回のオープンレクチャーについて
大学院生海外派遣事業採用者の決定について
「テクスト布置解釈学原論」の要約
第9回オープンレクチャーの要約
gCOE研究教育員ブリーフィング要約
gCOEスタッフ海外出張報告
【訃報・天野政千代教授（英語学）】

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

■ gCOE大学院生説明会について

下記の通りグローバルCOE大学院生説明会を開催しますので、ふるってご参加ください。

日時：7月9日（水）16:30～
場所：237講義室
内容：
・研究アシスタント募集について
・グローバルCOE論文賞について
・後期授業について

■ gCOE第4回国際研究集会の開催について

2008年7月19日（土）～21日（月）
『日本における宗教テクストの諸位相と統辞法』
名古屋大学文系総合館 7F カンファレンスホールにて開催
使用言語：日本語

日程等の詳細についてはグローバルCOEのWebサイトにアクセスして、研究活動＞国際研究集会をご覧ください。

■ 次回のオープンレクチャーについて

2008年7月16日（水）18：00～　国際センタービル15F GCOEオフィス
講演者：宮地朝子（文学研究科准教授・日本語学）
題目:「日本語形式名詞の文法変化」

■ 大学院生海外派遣事業採用者の決定について

2008年度グローバルCOE「大学院生海外派遣プログラム」第1回採用者が決定しました。

・玉田沙織（日本文学）［派遣先：アメリカ・University of California, Berkeley］
「『後撰和歌集』成立期和歌の享受」
・森田剛光（文化人類学）［派遣先：ネパール国立トリブバン大学］
「動的儀礼テクスト空間の形成についての映像人類学的研究アプローチ
---ネパール，商業民族タカリーの祭りファーローを事例に---」

■ 「テクスト布置解釈学原論」の要約

森際 康友

「解釈の隠された次元」（4月21日）
１．誰が、何のために解釈するのか。解釈行為に焦点を当ててしまうと、この問いが捨象されがちである。しかし、解釈権限の問題は、解釈の理解にとって不可欠である。
２．解釈にとって権力とは何か。解釈に大きな影響を与え、また、解釈（権）が大きな影響を与える権力というものに注目することが、テクスト布置解釈学には必要である。

３．権力とは何か。それは少数者が多数をその意に反しても少数の意志に従わせる力をいう。その手段として、権力の正統性調達と暴力による担保という二つの要素がある。
４．権力は悪か。人は権力を嫌いがちである。権力の本質を悪と見ている。が、それを本気で信じるならば、「人民による人民のための人民に対する」統治という民主主義、権力は正義を実現するためにあるとする「善玉権力観」が信じられないはずである。善玉権力はあり得ないか。
５．権力はないよりもあった方がよいか。それは人間の尊厳を奪う不正な秩序でもアナーキーよりもましだ、という意味ではない。集合生活あるところ、権力が成立しないということ、アナーキーはあり得ない。現実的には、自然発生的な権力か、自覚的権力か、という選択しかない。自然発生的な権力は不正か堕落しがちであるので、自覚的に権力を樹立・変革することが必要である。
６．善玉権力はあり得ないか。18世紀西欧に自覚的権力が生まれた。解釈という問題に即してその特質を見れば、それは共同体全体を拘束する公共的な決定と解釈の権限が、人民代表に、人民の利害（公益）に関する事柄についてのみ、公益を目標とする限りで、全面的に与えられる、とするものであった。それが人民主権である。善玉権力があり得るとすれば、これである。この権力は善玉たることを約束せずには存立し得ないからである。
７．よき権力による解釈とは何か。
腐敗から自由な司法府における、司法の担い手たちによってこのような解釈が行われているはずである。そのような眼差しで司法的決定を考察すべきである。

「よき解釈とは何か」（5月14日）
１．よき権力とは何か。治安・正義など、政治権力によってしか実現できない公共財を実現する権力。
２．いかにして公共財を実現するか。公共財を実現するためにだけ存在する公権力という新しい権力形態を樹立することによって。その権限は、封建的権力と異なり、市民各自に及ぶものであるが、適用領域は、公共の福祉（公共財実現）に必要な限り、と制約されている。
３．公権力の濫用・腐敗にどう対処するか。公権力の正統性は、人民の利益・公益実現する唯一至高の権力（主権者）であることにのみ存する、と法定することによって。公権力は、この公約を裏切り、それを展開した法を破れば、支配の根拠がなくなる。この（雇われマダム）タイプの権力は、己の

サバイバル・強化という私益を追求すればするほど、濫用・腐敗を避け、法を遵守して公益実現する。
４．何をもって公権力の濫用・腐敗とするか。与えられた権限を越えて公権力を行使すれば濫用。公権力を私益のために用いれば、腐敗。権限踰越や汚職について法で規定されているが、具体的事件におけるその判断は簡単でない場合がある。その時、誰のどのような判断が最終的権威となるか。裁判所の法判断である。
５．司法府による法判断とは何か。それは、”finding law on the merits of the case”という、立証と正しい推論に基づく、説得力のある規範的判断である。それは事件にかかる法に基づく判断である。が、法律の条文をテクストとするとは限らない。
６．裁判において解釈はどのような役割を果たすか。法が明確に語らないからこそ裁判になるのだから、訴訟における判断は裁判官の個人的価値判断に見える。が、裁判官の法判断は、それまでの法実践と事件における個別の事実に基づく、理由のある判断であり、勝手な評価ではない。そこでの解釈の対象は、解決されるべき事件である。原告の請求に理由があるか、すなわち、原告の権利主張を国家が保護すべきか、が問題である。それに答えるのが、判決・決定を支える公共的理由である。
７．法にとって解釈とは何か。正義という公共財を提供する公権力である裁判所は、法に基づく裁判を行うからその決定に権威がある。自然法は「書かれた理性 ratio scripta」と呼ばれたこともあったが、実定法とその解釈も公共的理由の記述である。公共的決定を正当化できる理由の体系こそ法であり、法解釈が法に権威と進歩を与える。

釘貫 亨（5月13日、20日）
＜日本語研究の近代化と西洋哲学＞
　ソシュールのラングの理論を批判した時枝誠記は、行動主義的な「言語過程説」によって知られる。時枝は、自らの理論構築に際してフッサールの現象学を参照したことを表明しているが、それは経験に先立ってあらかじめ観察対象の存在を前提することを禁止する現象学の理論に時枝が共鳴したからである。時枝と同時期に日本語音声理論を主張した有坂秀世の「音韻＝目的観念説」も観察者の主体的経験を最も確かなものとして重視する「現象学的」論理構成を備えていた。時枝は有坂の音声理論に共感を表明している。
　彼らより先に近代的文法学を確立した山田孝雄は、文、単語と言った文法

学の基本構成に関する定義に腐心した。山田は、「あるまとまりのある思想」を持つものが単語や文であり、何を以て思想の「まとまり」の要点とするかに関して「統覚作用」という概念を用いた。この概念は従来ヴントの心理学に借りたとされていたものであるが、より正確には哲学者カントの「先天的統覚」に拠ったものである。カントの哲学体系は、西洋形而上学の中枢を形成し、マッハやフッサールに強い影響を及ぼした。伝統的日本語研究の近代化に苦闘した山田、有坂、時枝の三人が既存の言語学ではなくともにカントを源とする西洋の形而上学に理論的な拠り所を求めた。彼らは、伝統的日本語研究の蓄積をもとに西洋の言語学を批判的に摂取した主体的な立場によって知られる。

佐藤彰一

＜５月２０日２限「歴史テクストの解釈学的特徴についての予備的考察」＞

　歴史テクストは過去に生じた出来事を記録した、いわゆる歴史記述と、時間的に過去に属する出来事を再構成するのに用いる記録に大別される。後者は必ずしも、過去の出来事を記した記録ではない。たとえば土地の賃貸借文書などは、作成された時点ではむしろ未来に属する事柄を内容としている。だが、歴史学の史料論ではこれらのテクストも過去を再構成するための重要なテクストとして扱われる。だがテクスト論の視点からすると、それは「歴史テクスト」とは別物である。歴史テクスト論が歴史学の史料論と袂を分かつのは、テクストが対象とする事柄が帰属する時制—表面的な時制ではなく、テクストの書き手が意識する時制として—のもつ重さの点においてである。

　歴史テクストは過去という時間を対象とするために、記録の対象となる過去という時間性を認識論的に考察する必要がある。過去の時制への回路である「記憶」の問題を、プラトン、アリストテレスや聖アウグスティヌスの時間論によりながら検討した。

＜５月２６日５限「封建制概念の解釈学的脱構築のためのアジェンダ」＞

前回の授業テーマが時間不足で、充分に論じ尽くすことができなかったので、引き続き「歴史テクストの解釈学的特徴についての予備的考察」を論じた。

歴史テクストが過去の出来事を記述した記録体であり、たとえば目撃譚のような記録である場合、執筆者が事実を再構成する上で根源的な条件がある。

それは自らの目撃したことを言語化し、記録するにあたって、直接の記憶に依存せざるを得ないということである。時間の経過のなかで、やがて同じ出来事を現場で見聞した人間が書き記した記録に接し、自らの記憶を正したり、別のレベルの記録を参照したりして、より客観的な記録として構築しようと試みることもあろう。だがこれは既に歴史の再構成、研究であり、歴史テクストとしての直接性は稀薄になっている。歴史テクストが、記憶を媒体として、アリストテレスが言うように、過去の娘である「似像（エイコン）」が紡ぎ出す表象の言語化であるとするならば、過去表象の解読はコンテクストの変化によって容易に別様な言語化にいたるであろう。歴史テクストは記憶という表象解読を本質する限り、現にあるテクスト（顕在テクスト）とその背後に潜み、書き手の内面で生じるコンテクストのゆらぎによって顕在化する可能性をもった無数の潜勢テクストの総体とみなすことができる。

■　第9回オープンレクチャーの要約

2008年6月18日（水）18時〜19時　国際センター15F gCOEオフィス
宮川繁gCOE特任教授・MIT教授
題目：「Visualizing Cultures: 視覚を通して見た歴史」

歴史学は、主に文章で書かれた資料を分析する。マサチューセッツ工科大学では、2002年から、Visualizing Culturesというプロジェクトが行われており、伝統的なアプローチでは無視されてきた、歴史的に貴重な画像を中心に歴史を考える試みをしている。「敗北を抱きしめて」でピュリッツァー賞を受賞したジョン W. ダワー歴史学者との共同プロジェクトで、ボストン美術館、スミスソニアン美術館、広島原爆資料館、資生堂など、貴重な画像のコレクションを所有しているところと提携しながら、視覚を通して見た歴史学を開発している。

■ gCOE研究教育員ブリーフィング要約

第6回ブリーフィング(2008/5/21)

前澤大樹「形容詞修飾と不連続AP構文」

本発表では、形容詞による名詞の修飾に於いて、しばしば対比的な意味的・語用論的機能を示す名詞前位形容詞と名詞後位形容詞の、構造を始めとした統語的な差異を明らかにするために、特定の条件下のみで許される(1a)のような不連続AP構文を特に取り上げ、いわゆる主要部終端効果と相容れ難く思われるその振る舞いと、分布に課された制約を説明することを試みた。形容詞修飾の分析が説明すべき一般化である主要部終端効果を扱うために、名詞前位形容詞にNP上位の主要部としての地位を与えるAbney (1987)のような分析を基本的に受け入れつつ、本発表では、不連続AP構文に見られる名詞前位形容詞は、(1b)に示すように後位修飾構文の基底構造から主要部NPの繰上げによっても派生されたものであると主張した。この分析はまた、不連続AP構文が許されるのは非対格型の中でも繰上げ型に限られるという一般化を適切に説明できることを示した。

(1) a. a similar car to mine (cf. a car [AP similar to mine])
b. [DP a [aP [NP car]i a [AP similar [PP ti to mine]]]]

永田道弘「大衆小説の布置 –レーモン・ルーセル『アフリカの印象』と同時代の植民地小説」

前回のブリーフィングに引き続いて、レーモン・ルーセルの『アフリカの印象』の生成過程を分析した。今回の発表では、フーコーらのように記号論的システムといったあまりに一般的な次元でルーセルの作品に現実批判を読むのではなく、生成過程の中で生じた荒唐無稽なアフリカが、具体的にどのような方向で西洋におけるアフリカの表象の閉域を脱出しえたのかを見るために、ルーセルと同時代のアフリカを扱った通俗小説によって形作られる布置の中に彼の小説を定位し、それらの作品との間の類似や差異を同定することを試みた。このようなアプローチで明らかになった点は、ルーセルが既存のそれぞれの小説モデルの要素を部分的に借用しつつも、どれか特定のタイプの植民地小説を志向するのではなく、どれからも距離おいたポジションで自身の作品のオリジナリティを追及したということである。そしてこのオリジナリティは、黒人王の人物像–女装して歌を歌うアンドロギュノス的な存在–で特に顕著なものとなる。この女装した黒人王の表象は、植民地主義が自明のものとしている人種化されたセクシュアリティ（西洋＝男性／非西洋＝

女性）の図式を一時的に宙吊りにすることで、一種のイデオロギー批判の可能性をも胚胎しているとも考えられる。

■ gCOEスタッフ海外出張報告

鎌田隆行（gCOE事業推進担当・フランス文学）

5月27日〜6月3日、フランス・パリに出張し、シンポジウム「バルザックのマテリアリズム」にて研究報告を行い、またフランス学士院図書館でバルザック『セザール･ビロトー』の作品生成資料を調査した。
フランス学士院図書館ではロヴァンジュール文庫所収の同作品の草稿および校正刷りを閲覧した。全体で千ページ以上に及ぶ膨大な資料体であり、作中に見られる複数の架空の広告文の生成に焦点をあて、関係箇所の解読と転写を行なった。
シンポジウム「バルザックのマテリアリズム」（5月30〜31日）は国際バルザック研究会(Groupe International de Recherches Balzaciennes)の主催によるもので、パリ16区のバルザック記念館の図書室が会場となった。同研究会では毎年決まったテーマのもとに通年のセミナーとシンポジウムを開催するのが定例となっている。近年はバルザックの初期作品や、これまでに研究・批評の対象になることが少なかった「分析的研究」を取り上げ、この作家の膨大な作品群をより包括的に理解しようとする試みがなされてきたが、今回はその延長線上で、ジャック＝ダヴィッド・エブギー氏（ナンシー第２大学）をオルガナイザーとし、バルザックにおけるマテリアリズムの現れを多角的に考察することを目的としたものである。フランスおよびヨーロッパ諸国の主要なバルザック研究者を中心に、両日あわせてのべ50人ほどの出席者があり、発表者の多くは主に哲学的概念としてのマテリアリズムを分析の対象とし、「哲学者バルザック」と「小説家バルザック」が交錯するテクスト空間として『人間喜劇』を捉えなおす刺激的な論考を提示した。拙論はむしろ美学的な見地からバルザックのマテリアリズムを考察することを試み、バルザックがその作品制作の実践的局面において草稿や校正刷りという支持体の特性を強く意識し、印刷業の経験で得たノウハウを活かしながら独自の詩学を開拓していったことを『セザール・ビロトー』のフィノの広告文の変容を例にとって生成論的アプローチによって論証した。

【訃報・天野政千代教授（英語学）】

グローバルCOE教育プログラム推進室長、日本英語学会会長の文学研究科英語学研究室・天野政千代教授におかれては、療養中のところ、去る6月13日に逝去されました。
謹んでご冥福をお祈り致します。

次回のメール版NewsLetterの発行は2008年7月中旬を予定しています。

・・・…━━━…・

GCOE「テクスト布置の解釈学的研究と教育」

Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/

NewsLetter No.9
発行：GCOE編集部
編集担当：鎌田隆行

Copyright(C) 2008 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

・・・…━━━…・

---

gCOE_fellows mailing list
gCOE_fellows@gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp
http://svr.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/mailman/listinfo/gcoe_fellows